

テーマ展「兜 その形と美—星兜から変わり兜まで—」展示作品リスト

番号	指定	作品名称	数量	時代	所蔵者	備考
◆兜の形—鉢と鞆—						
1		しゅうこじっしゅ かっちゅうへん 集古十種 (甲冑編)	1冊 (12冊のうち)	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	平安～南北朝時代に制作された兜の図を多数掲載。
2	市指定 文化財	てつじさんじゅうにけんほしかぶと 鉄地三十二間星兜	1頭	桃山～ 江戸時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	そうとめいえきだ 早乙女家貞の作。
3	市指定 文化財	てつじろくじゅうよんけんこほしかぶと 鉄地六十四間小星兜	1頭	室町時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	みょうちんのぶいえ 明珍信家の作。 小型の鉢 (小星) を用いた星兜。
4	市指定 文化財	てつじさんじゅうよんけんすじかぶと 鉄地三十四間筋兜	1頭	室町時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	しころ 鞆などは江戸時代の作。
5		しゅうるしぬりずなりかぶと 朱漆塗頭形兜	1頭	江戸時代中～ 後期	彦根城博物館	ひねのずなり 日根野頭形。
6		てつじたみかぶと 鉄地畳兜	1頭	江戸時代後期	彦根城博物館 (孕石真一氏寄贈)	鉢上部を開閉式にした畳兜。
7		しゅうるしぬりちようちんかぶと 朱漆塗提灯兜	1頭	江戸時代後期	個人	提灯のように兜鉢が上下に伸縮する。
8		しゅうるしぬりちようちんかぶと 朱漆塗提灯兜	1頭	江戸時代後期	彦根城博物館	提灯のように兜鉢が上下に伸縮する。
9	市指定 文化財	くろうるしぬりさんじゅうろっけんすじかぶと 黒漆塗三十六間筋兜	1頭	江戸時代中～ 後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	かさじころ 笠鞆とする。
10		てつじろくじゅうにけんこほしかぶと 鉄地六十二間小星兜	1頭	江戸時代前～ 中期	彦根城博物館	まんじゅうじころ 饅頭鞆とする。
11	市指定 文化財	てつじろくじゅうにけんこほしかぶと 鉄地六十二間小星兜	1頭	江戸時代中期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	みょうちんよしつぐ 明珍吉次の作。 鞆を3分割する (割鞆)。
◆変わり兜—さまざまな意匠—						
12	県指定 有形 文化財	しゅうるしぬりこんいとおどしおけがわにまいどうぐそく 朱漆塗紺糸威桶側二枚胴具足	1領	桃山～ 江戸時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	長大な金の ^{おおてんつき} 大天衝を ^{わきだて} 兜の脇立とする。 井伊家初代 ^{なおよま} 直政所用と伝える。
13	県指定 有形 文化財	しゅうるしぬりずなりかぶと 朱漆塗頭形兜	1頭	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	大天衝脇立、 ^{からのかしら} 唐頭を ^{ずたて} 頭頂につける頭立とする。 井伊家3代 ^{なおよま} 直澄所用と伝える。
14	県指定 有形 文化財	ごへいたてもの 御幣立物	1本	江戸時代中期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	御幣を象った ^{たてもの} 立物。 井伊家10代 ^{なおよま} 直幸所用と伝える甲冑に附属する。
15	市指定 文化財	ぎゅうじ つのたてもの 牛耳・角立物	1対	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	兜に附属する牛の耳と角を象った立物。
16		かわてもんどよしゆきぞう 川手主水良行像	1幅	江戸時代末期～ 明治時代	個人	彦根藩士の ^{かわてもんどよしゆき} 川手主水良行の画像。 ^{しころ} 鞆および後立に白毛を付ける。
17	県指定 有形 文化財	ぎんじとっばいなりかぶと 銀地突笠形兜	1頭	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	鉢の先端を尖らせ、 ^{しころ} 鞆には白毛を添える。 井伊家2代 ^{なおよま} 直孝の子息 ^{なおよま} 直滋所用と伝える。
18	市指定 文化財	しゅうるしぬりしいなりかぶと 朱漆塗椎形兜	1頭	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	彦根藩士の ^{はったきんじゅうろう} 八田金十郎所用と伝える。
19		てつじまがりとっばいなりかぶと 鉄地曲突笠形兜	1頭	江戸時代後期	個人	鉢の先端が前方に向かって ^{まがりとっばいなりかぶと} 巻く曲突笠形兜。 彦根藩士の ^{うつきかげよし} 宇津木景福所用と伝える。
20	市指定 文化財	てつじずきんなりかぶと 鉄地頭巾形兜	1頭	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	頭巾を模した形の鉢に、熊毛を植毛した ^う 装飾を ^{しろだて} 後立とする。 遠江国井伊谷を治めた ^{いいのや} 近藤貞用所用と伝える。
21	市指定 文化財	くろうるしぬりたつなみなりかぶと 黒漆塗立浪形兜	1頭	桃山～ 江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	波頭の意匠を ^{はりかけ} 張懸で設ける。 旗本の ^{あんどうしげのり} 安藤重矩所用と伝える。
22	市指定 文化財	くろうるしぬりとじなりかぶと 黒漆塗兔耳形兜	1頭	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	兔の耳を象った意匠を付ける。

写真解説

*番号は作品リストに則しています。

3 鉄地六十四間小星兜 1頭

鉢高 17.2cm

明珍信家作

彦根市指定文化財

室町時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

室町時代末期に活躍した甲冑師明珍信家の手による兜。頭を覆う鉢は64枚の細長い鉄板を接ぎ、それぞれを鉾で留めています。鉾の頭は鉢の表面に出ており、それを星と称したことから、この形式を星兜と呼びます。

平安時代に生まれた星兜は、兜の標準的な形として制作されましたが、室町時代に入ると鉾の頭を平滑にした筋兜が流行します。本作が作られた室町時代末期になると、再び星兜が登場するものの、その形は初期のものとは異なっています。平安時代の星兜は、山形の鉢に大型の星を1行に約10点ほど打ち込み、厳つい印象を与えるのに対し、本作は、当時の筋兜に見られる鉢の上部を一部窪ませた優美な曲線で表され、小さな星が1行に倍以上並んでいます。また、室町時代末期は、たびたび戦が起こり、兜には相応の強度が求められたため、鉄板を60枚前後使用し、それぞれが重なる幅を広げることで堅固にしました。

本作は、古い形式を用いつつ、制作された時代の流行や需要に則した兜と言えます。



7 朱漆塗提灯兜 1頭

鉢高 13.5cm

江戸時代後期

個人蔵

提灯兜は、江戸時代に登場した兜で、ドーナツ状の鉄板を同心円状に連ねて鉢を構成します。鉢上部の横に張った細いアーチ状の材から頭頂の金具を外すと、鉢が下方に縮む仕組みです。提灯のように伸縮する構造から、提灯兜の名が付き、こうした小さく畳める兜を総じて畳兜と言います。



コンパクトに収まる提灯兜は、やはり折り畳むことが可能な畳胴と合わされました。この組み合わせは、一般的に携行用や下級武士の甲冑として用いられ、彦根藩でも足軽が使用していたことが分かっています。

提灯兜は、頭部を守る防具という本来の目的より、携行や収納に特化した構造が優先されており、防護以外の機能を重視した兜の1つに挙げられます。

12 朱漆塗紺糸威桶側二枚胴具足 1領

洞高 40.7cm

滋賀県指定有形文化財

桃山～江戸時代初期

当館蔵（井伊家伝来資料）

彦根藩井伊家初代直政なおまさの所用と伝える甲冑かっちゅう。室町時代末期に登場した当世具足と呼ばれる形式で、隙間なく身体を覆い、籠手こてに上腕の防具である袖を仕付けるなど、実戦における機能性に重きを置いた甲冑です。

本作の兜は、数枚の鉄板を効率的に組み合わせた頭形兜ずなりかぶとで、室町時代後期に登場し、甲冑の需要が高まった戦国の世に主流となった兜の形式です。従来の星兜や筋兜に比べ、シンプルな作りが特徴ですが、本作は長さ80cmほどの大天衝おおてんつきを脇立にする目立つ形状から、桃山時代に生まれた奇抜なデザインの「変わり兜」の1つとして広く知られています。

この大天衝脇立は、井伊家当主の象徴として、幕末まで歴代当主の甲冑に受け継がれていきました。



21 黒漆塗立浪形兜 1頭

総高 36.1cm

彦根市指定文化財

桃山～江戸時代前期

当館蔵（井伊家伝来資料）

荒々しく左右から立ち上がる波頭を表した変わり兜。桃山時代に誕生した変わり兜は、戦場において自らの存在を周囲に主張するため、頭部を覆う鉢の部分を目立つ造形に加工したり、あるいは鉢の上に動物や器物などを象った意匠を据え付けたりしました。本作のように大型で複雑な曲線を描く意匠を鉢に載せる場合、意匠部分は和紙などで張り子状に成形し、鉢に固定します。

変わり兜の意匠は種々様々ですが、例えば神仏からむしや勝虫（トンボ）、渦巻く波などの意匠は、目立たせる目的のほか、その意匠化された対象が持つ力を纏うことで、その力を得るという効果を狙ったとも考えられています。

本作の迫力ある造形も、そのような効果を意図して、大自然が持つ力強いエネルギーを表そうとしたのかもしれませんが。

